

---

# 俺の名前ってなんだっけ？

黒部 愁矢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の名前ってなんだっけ？

### 【Nコード】

N5673Z

### 【作者名】

黒部 愁矢

### 【あらすじ】

高校一年生だった、主人公は先輩と山登りをしていると、熊に追われることになった。そしてちょっとしたミスから異世界に転生してしまう羽目に。

突然異世界に放り込まれた主人公がそれなりに楽しみながら生活して、のんびりと元に戻る方法は期待せずに探す物語です。

作者の語彙力が半端なく乏しいため、生暖かい目で「こいつ変な言葉の使い方してやがる」って感じに笑ってやってください(^^) ;

## プロローグ（前書き）

こんにちは、こちらに初めて小説を投稿させてもらう黒部 愁矢しゅうやです。

この小説は主人公がのんびり生活するものですが、意外とノリで進む場面もあるはずですので気軽に楽しく読んで頂けたら幸いです。

## プロローグ

「なんでこうなった・・・」

必要最低限の家具しか置かれていない質素な部屋で3歳ほどの少年は子供らしい柔らかな髪をいじくりながら顔をしかめていた。

確か、俺がこうなってしまったのはあの時のはずだ・・・

ある秋の日、高校一年だった俺は先輩と葉がもう十分に紅く色づいた山道を歩いていた。

「ちよつと 君。もう少し立ち止まって景色を楽しみながら行きましょうよ」

「この景色より頂上の方が綺麗だと思いますが。もしかして先輩はもう疲れてしまったんですか？」

後ろを振り向くと案の定、額に汗を浮かべながら邪魔にならないように髪を一本に後ろでまとめた女性がこちらにきている。

「そりゃ、運動してこなかったオタクにはこの山道は厳しいわよ」  
何故か自慢げに胸を反らした。

「そんなに堂々とオタク宣言をしなくても・・・あ、もうそろそろ頂上みたいですよ」

とりあえず、ボケた彼女を無視することにして前を向くと上に向かう道が途中で消え、視界が開けているのが見えた。それを見ると、先ほどの疲れたような顔が一遍してパツと明るくなり全力で走り出した。

「全く、ペース配分を考えたら絶対頂上に着いた瞬間に動けなくなるだろ」

独り言を呟きながら歩いていると数十秒後、頂上から先輩らしき叫び声が聞こえた。

急いで先輩のもとへ走っていくと何やら黒い大きな物体が見えた。

（いや・・・まさかとは思うがアレが出たりはしないだろうな。）  
嫌な予感がするが、なるべくその予感が当たらないことを祈りながら先輩のもとに着いた。

そこでは、見事に腰を抜かして一步も動けない先輩とその先輩の2倍はあると思われる熊が対峙していた

見事に予感中である

とりあえず熊の意識を先輩から逸らすために手近にあった自分の拳より少し小さい石を2、3発顔に投げつけた。

「おい！ こつちだ！！」

叫ぶとその熊はこちらにゆっくりと振り向いた。と同時にその熊は何か悪いキノコでも食べたのかヨダレを垂らしながらこちらへ俺を食い殺さんという形相で走り寄ってきた。

「先輩！ 俺が時間を稼ぎますので早く山を降りてください！」

「でも 君が・・・」

「いいから！！」

ようやく立つことが出来た先輩が自分の心配をするが叫び返すと、素直にもと来た道を駆け下りていった

ここまでで一旦思い出すのを止めて、部屋の中心に直立不動で考え込むのは妙だと思い、ベッドで寝転びながら考えることにした。確か、ここまででは普通ではなかったが、こうなる原因はなかったはずだ。

「あの後だったかな……。確かその次あたりに確か事の発端が起きた気がする」

先輩を山から逃がした後、俺は熊から逃げ続けた。とにかく熊の直線状に入らないように縦横無尽に駆け回りながら必死で山中を逃げ続けた。

すると……

「なんで俺らまで巻き込まれてんだよ!!!」

「それはこっちのセリフだ!!!」

途中から何故か親友二人が俺の隣を一緒に走っていたのだ。

「折角、お前があのおタクだけど美人先輩と二人つきりで山でデートをするって聞いたから冷やかしてやろうと思って、隠れて見ていたのになんで俺らまで死にかけてるんだよ」

「そりゃあ、その野次馬根性で来た結果だろうな」

俺とバンダナを巻いた親友が軽いがみ合っていると、その間にもう一人の眼鏡をかけた親友が声を発した。

「そんなことよりさ、とりあえずあの熊は多分どれだけ逃げても追いかけてくると思うから、あいつを倒す策があるんだけど二人とも聞かない？」

その言葉にいがみ合っていた俺たちは一旦その提案に耳を傾けた。

「おい！　ここでいいのか！」

走り始めて大分経つたろうか。やはり熊は執拗にどこまでも追いかけてきて俺たちは断崖絶壁を背にして、前方でこちらへ突進している。

「うん。タイミングが重要だから3、2、1で一斉に横に飛んでね」  
策というのは単純にあの熊が突進してくることしか頭のないのを利用して断崖絶壁で待ち構え、ぎりぎりまで避けて熊だけを落とすという寸法らしい。

6

・・・それにしてもこの策は本当に大丈夫なのだろうか。

そう悠長に考えている暇もなく、熊が俺たちのところまで後、数秒の時になった。

「それじゃ。　3！」

「2！」

3人が一斉に身構えた。そして後は横に飛べば済むはずなのだが・

「いち！つてええええ！！？」

動かそうとした足が動かなかった。そして更に驚いたことに、顔以外は全く動かなかったのだ。

他の二人も全く同じ状況らしく、突然の出来事に目を丸くしている。そうして目の前の熊は全く勢いを衰えさせず、突っ込んで俺たち3人は崖に突き落とされた。

「・・・で、この状態か」

俺は今一度再確認した変えようが無い事実思わず盛大なため息が出た。

「一体俺にこの姿になってどうしろっていつんだよ」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5673z/>

---

俺の名前ってなんだっけ？

2011年12月18日23時51分発行